



MONGOLIA

学校名: 立川市立松中小学校

氏名: 安達 友紀

[担当教科: 全科]

● 実践教科等: 学級活動

● 時間数 : 5時間

● 対象生徒 : 第2学年

● 対象人数 : 33人

1 単元名

せかいのなかまとわたしたち

2 単元の目標

- ・モンゴルを知ることを通して、世界の様々な国について興味・関心をもつ。(関心・意欲・態度)
- ・モンゴルの文化や生活を通して、世界には様々な国があることを知り、その違いや共通点について気づく。(知識・理解)
- ・モンゴルと日本との関わりについて知り、自分たちにできることについて考える。(思考・判断・表現)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための教材を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

国際化・多様化が進み、世界的な相互依存が増大してく中で、子どもたちが将来さまざまな国の人々と関わる機会は多くなると考える。その中で、互いの違いを尊重しながら、自ら考え主体的に生きる力を育むため、モンゴルという国を通して、開発途上国や世界を取り巻く諸問題があることを知り、自分にできることを考える活動を設定した。

2年生という発達段階を踏まえて、導入部(1時・2時)では「モンゴルクイズ」を行い、興味を引き出しながらモンゴルの基本的な情報や文化、生活について知る活動を行う。展開部(3時・4時)ではモンゴルの抱える課題や日本との関わり、活躍している日本人について知り、ポスター制作を通して自分にできることを考える活動を行う。ポスター制作は、それまでの授業で使用した写真を選んで貼り、見出しを書くという単純な作業にした。自分の考えをもたせることに重点を置き、ポスター制作自体に困難を感じさせないようにするためである。さらに、まとめ(5時)ではポスターセッションを行い、考えを深めていく。

(2)児童生徒観

素直で何事にも意欲的に取り組むことができる児童である。今年度は研究授業として、1学期に初めて外国語の授業を行った。ALTの先生との交流や外国語を使うことに対して、柔軟に、また大変意欲的に取り組む姿が見られた。新しい知識や考えを得ることを、楽しむことができる児童が多い。

今回、国際理解教育の授業を行うのは初めてである。事前アンケートを行い、知っている国を書かせると、多くの児童がアメリカやフランスなどの欧米諸国を挙げていた。一方で、開発途上国を挙げる児童はほとんどいなかった。外国語活動などを通して、外国には興味をもった一方で、一口に外国はといってもそのイメージには偏りがあり、開発途上国は児童にとって遠い存在であると感じた。また、同アンケートで「モンゴルという国があることを知っている」と答えた児童は33名中5名、さらに「モンゴルについて知っていることを書きましょう」という問いに対しては、誰も回答することができなかった。このことから、児童はモンゴルや開発途上国についての知識は、ほぼ無いということが分かった。そのため、まずは「知る」という活動を写真や動画などの教材を使って丁寧に行うことで、興味・関心をもたせたいと考えた。そして世界には様々な国があるということ、それぞれの文化や生活があり、また課題もあるということを知り、自分にできることを考える活動へとつなげていきたい。

(3) 指導観

素直に新しい知識を受け入れることができる2年生という発達段階を踏まえて、まずは開発途上国に対して興味・関心をもたせ、ポジティブな印象がもてるように授業を進めていきたいと考えた。これについて、子供たちには、「(モンゴルに)行きたい」という視点で、授業ごとにワークシートに「行きたいメーター」を記録することで振り返らせることにした。また、「支援国・被支援国」という単純な上下関係で捉えるのではなく、「協力国」としての相互依存の関係として捉えられるよう、できるだけみ砕いて平易な言葉で伝えていきたいと考えた。これについては、「(国と国が)仲良くする」「協力する」という言葉を意図的に用いるようにして子供たちに伝えていく。

5 評価基準

観点	他国の文化・生活に対する 関心・意欲・態度	他国の文化・生活に対する 知識・理解	他国の文化・生活に対する 思考・判断・表現
評価規準	・モンゴルを知ることを通して、外国には様々な文化・生活があることを知り、諸外国に興味・関心をもっている。	・モンゴルを知ることを通して、外国には様々な文化・生活があることを知り、日本との違いや共通点に気づく。	・諸外国が直面する課題に対して、理解を深め、自分ができるのかを考えている。 ・自分に今できることを考えて、ポスターに表現している。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート ポスター	学習の様子 発言 ワークシート ポスター	学習の様子 発言 ワークシート ポスター

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
事前	事前アンケート	・児童のモンゴルやその他の海外の国々についての知識について調査を行う。	・事前アンケートをとる。
1	モンゴルについて知ろう。	・モンゴルの基本的な情報(国土、言語、文化など)を知り、モンゴルに興味をもつ。	・モンゴルについて、知っていることを出し合う。 ・モンゴルクイズを行い、モンゴルの基本的な情報を知る。
2	モンゴルの生活とわたしたちの生活をくらべよう。	・モンゴルの子どもたちの生活(学校生活、日常生活)について知り、日本との違いや共通点があることに気付く。	・モンゴルクイズを行い、モンゴルの子どもたちの学校生活や日常生活について知る。 ・日本との違いや共通点について、まとめる。
3	モンゴルと日本とのつながりについて知ろう。	・モンゴルに開発途上国が抱える問題があることを知る。 ・それらの諸問題に対する日本の支援やJICAやJOCVの活動について知る。	・第1時、第2時で見せた写真の中に、日本とのつながりがあることを見つけ出す。 ・モンゴルの抱える諸問題について知る。 ・日本がモンゴルに支援をしていることを知る。 ・モンゴルで活躍している日本人について紹介する。
4	自分たちにできることを考えて、ポスターを作ろう。	・開発途上国が抱える問題を踏まえて、自分たちに何ができるかを考える。	・モンゴルの写真を1枚選び、見出しやコメントを入れてポスターを作成する。
5	ポスターセッションをして、自分たちにできることを発表し合おう。	・友達の考えを知ることによって、開発途上国が抱える諸問題や、それに対して自分ができることについて考えを深める。	・友達と交流し合い、ポスターを発表する。

7 授業事例の紹介

小単元名【ポスターセッションをして、自分たちにできることを発表し合おう。】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月22日(土)第4限

(イ)実施会場 2年2組教室

(ウ)本時の目標

・友達の考えを知ることによって、開発途上国が抱える諸問題や、それに対して自分ができることについて考えを深める。

(エ)指導のポイント

・前時までの学習を板書で振り返り、これまでの学習を想起させた。

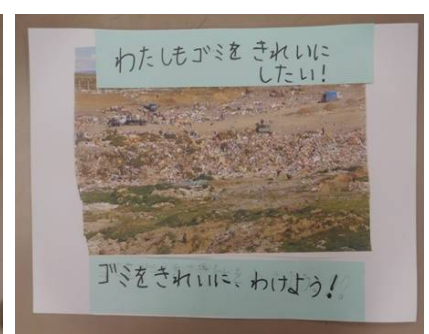
・全体での交流の前に班での交流の時間を設け、ポスターセッションの進め方について理解させた。

・なぜそのポスターを作ったのか、その理由や根拠をもたせ、発表させるようにした。

・友達のポスターに付箋に感想を書いて貼ることで、友達の考えを知り理解を深められるようにした。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	1 前時までの学習の振り返りをする。 【1】、【4】 【6】	・前時までの学習の流れをおさえ、本時のめあてを知る。	一斉	・問答しながら、簡単に振り返りをする。 ・大切な言葉を押さえて板書にまとめ、今まで学習したことが視覚的に分かるようにする。	
ポスターを はっぴょうし合おう。					
展開 30分	2 班でポスターを発表する。 【2】、【3】 【5】	・班でポスターを発表する。 発表者は、ポスターを見せながら、メッセージ(見出し)と、それを考えた理由を言う。 ・友達の発表を聞いたら、付箋に感想を書いてポスターの裏に貼る。	班	・ただポスターを見せるだけではなく、それを考えた理由も合わせて発表させる。ポスターに説得力をもたせ、相手に自分の考えをより深く分かり易く伝えるようにする。	・開発途上国が抱える諸問題に対して、自分ができることについて考えをもち、表現している。(ポスター、学習の様子、発言)
	3 全体でポスターを見合う。 【2】、【3】 【5】	・自由に友達の書いたポスターを見て、付箋に感想を書いて貼る。 ・何名か発表をする。	一斉	・自分の考えと比べながら、友達の発表を聞かせるようにする。 ・自ら挙手して発表させたあと、良かったと思うものを推薦してもらい、より多くの発表が出るようにする。	
まとめ 10分	4 本時の振り返りをする。 【6】	・本時の学習を振り返り、ワークシートに感想と「行きたいメーター」を書く。 ・何名か発表をする。	個人 一斉	・ポスターセッションの感想と、単元を通じた活動を振り返り、感想を書かせる。 ・学習したことをこれからの生活に生かしていけるよう、教師が講話をする。	・開発途上国が抱える諸問題に対して、友達の考えを聞くことによって、自分の考えを深めている。(ワークシート、発言) ・諸外国に対して、興味関心をもっている。(ワークシート、発言)



(4) 参考資料等

- ・国別データブック(外務省) <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/files/000142135.pdf>
- ・国別生活情報(JICA)
<https://www.jica.go.jp/regions/seikatsu/ku57pq000005g185-att/Mongolia-p.pdf>
- ・「モンゴル(世界のともだち)」 清水哲郎(著、写真) 偕成社
- ・「モンゴルのごはん(絵本 世界の食事)」 銀城 康子(著), 高松 良己(イラスト) 農山漁村文化協会

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

- ・全体を通して児童の反応はとてもよく、興味をもって意欲的に学習に取り組むことができた。
- ・休み時間にもモンゴルにふれたり、図書の時間に外国に関する本を読んだりする児童が増えた。
- ・第3時のモンゴルが抱える課題を提示する場面で、児童の関心が下がるのではないかと予想していたが、予想に反して関心が高まった児童が多かった(ワークシートの「行きたいメーター」による見取り)。その理由としては、日本人や日本の機関が支援に関わっていることを知り、「自分も助けたい」「日本の技術はすごい」など前向きな気持ちをもてたからだと思われる。

第1時を終えての児童の感想

- ・いろんなことを知って、たのしかったです。モンゴルに行ってみたいと思いました。
- ・ゲルにとまってみたい。でもトイレはできなさそう。
- ・モンゴル人が日本人のことがすきなんてびっくりした。うれしかったです。
- ・ふつうにうまとかが歩いているなんてびっくりしました。
- ・モンゴルのことをもっともっと知りたいです。

第2時を終えての児童の感想

- ・もっとモンゴルに行ってみたいと思った。日本と同じことがいっぱいあるのがちょっとびっくりした。
- ・モンゴルの人たちは、自分ひとりでできないことを、家ぞくやともだちとやりあって、水くみやりょうりなどができてるんだなと思いました。
- ・学校がごぜんとごごに分かれていて、びっくりしました。
- ・日本と同じものもたくさんあって、もっとモンゴルに行きたくくなりました。
- ・日本のアニメがはやっていたのでうれしかったです。

第3時を終えての児童の感想

- ・日本とモンゴルがつながっているなんて、すごいなと思いました。
- ・モンゴルのことをいっぱい知って、モンゴルのしえんをしたい。
- ・学校を作ったのが日本人だったのがおどろきました。かべなどに、日本のこっきがはってあったのもおどろきました。
- ・日本がいいことをしていて、いいなと思います。モンゴルをいろいろたすけているのがいいです。
- ・モンゴルにきょう力をしたいと思いました。きょう力は大切だということがわかりました。
- ・モンゴルもいっぱいがんばってるんだなと思いました。ぼくはたすけてあげたいと思いました。
- ・できればみんなでほかのくにやモンゴルをよくしたいと思った。わたしも日本のぎじゅつをおしえたいと思った。
- ・大きくなったら、日本語を教えてあげたい。みんなときょう力して学校を少しでもふやしたい。
- ・日本人はすごいぎじゅつをもっているんだなと思いました。
- ・ぼくもジャイカの人たちときょう力したい。
- ・わたしは、大きくなったらしえんがひつようなくにへ行って、ぎじゅつや日本語をおしえたいです。
- ・ぼくもきょう力たいやジャイカの人みたいになりたいです。

第4時、第5時を終えての児童の感想

- ・みんなとてもやさしいと思います。りゆうは、たすけたい、きょう力ということばいっぱいあったからです。
- ・〇〇さんの「ものを大切にしたい」ということばがすてきだと思いました。みんなのポスターや考えを見

るのがたのしかったです。

- ・モンゴルのことを知れてよかった。わたしは、さいしょ、モンゴルはいい町だと思っていたけど、ちがうところもあってびっくりした。だから、わたしもゴミをちゃんと分けたりしてモンゴルの町をよくしたい。
- ・みんなを見て、みんなモンゴルときょう力したいという気持ちがすごかったです。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

段階	項目
P 計画	指導計画を立て、授業のねらいと明確にして指導案を作成した。
D 実施	・指導計画ねらいを達成するために、写真・動画・具体物などを活用して授業を実施した。 ・教室の一角に「モンゴルコーナー」を作り、授業で使ったクイズや写真、衣装、工芸品、図書館で借りた本などを自由に見たり触ったりできるようにして、授業時間以外にもモンゴルに触れられるようにした。 ・毎回授業の振り返りをワークシートに記入させた。それに目を通して、次時の授業内容を検討した。
C 検証	〈成果〉 ・モンゴル、そして開発途上国について、興味関心をもつことができた。 ・世界が抱える課題や問題について真摯に考え、児童なりに自分の考えをもつことができた。 ・モンゴルと日本の関わりや、モンゴルで活躍している日本人について知り、問題を身近なものとして捉えることができた。 〈課題〉 ・全体を通して、教師が伝えたいことが多すぎて1時間に詰め込みすぎてしまった感がある。 ・JICAの支援や青年海外協力隊の活動について、低学年にも分かるように説明をするのが難しく、時間がかかってしまった。事前によく検討しておく必要がある。 ・考えをもつのが難しい児童もいた。個別の助言や支援が必要である。
A 改善	・児童の発達段階に合わせた提示の仕方や発問を精査する。また、情報過多にならないよう、必要な情報を取捨選択する。 ・教科や領域などの指導計画を見直し、今後も系統的に国際理解教育を取り入れていけると良い。また、校内での共有も進めていきたい。

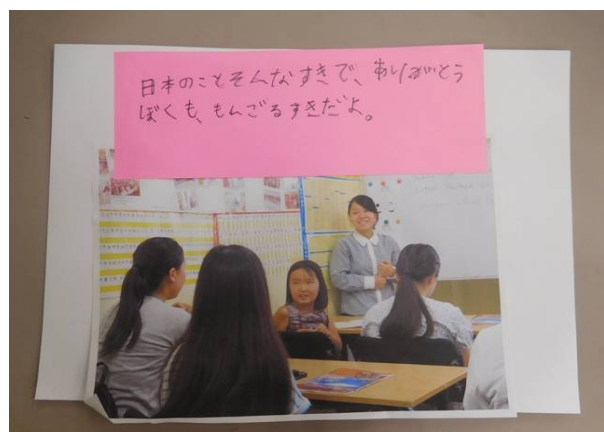
10 教師海外研修に参加して

大変学びの深い研修であった。モンゴルでは、旅行では行けない現地の学校や施設の数々を訪問でき、モンゴルの生活の実態と課題について、まさに私自身が「体験的な学び」をすることができた。観光地を回るだけでは分からないたくさんのものを得ることができたと思う。特に、学校への訪問で、職員の方や子供たちと交流できる場や、ゲルで生活体験ができたことなど、授業の素材として使えるものをたくさん得ることができた。学校に戻って国際理解教育の授業を行うということをよく考えて訪問先を選んで下さったことが大変ありがたかった。

また、日本の様々な支援について知ること、自分自身が相互依存や協力関係について考えるきっかけとなった。日本の支援、特に人材育成における丁寧で相手のことを考えた支援のやり方については大変共感をしたと同時に、誇りにも思った。また、それらの支援により、モンゴル人が非常に親日であるということを知り、「国と国とが互いに協力国であり、良い関係を築くことの大切さ」も感じた。そしてそれは、今回の授業実践を通して軸として伝えたいことのひとつとなった。

子供たちが作成したポスターの中に、「日本のこと、そんなにすきでありがとう ぼくもモンゴルすきだよ」というメッセージがあった。「自分にできることを考える」というねらいからは少し逸れているかもしれないが、このポスターを見つけたとき、私は「この授業をしてよかった」と率直に感じる事ができた。この研修で学び、授業を通して伝えたいと思ったことが、少しでも子供たちの心に刻まれたのではないかと感じた瞬間であった。

今回の授業実践で得たものをもとにさらに研鑽を積み、今後も小学校における国際理解教育を



長期的に推進していきたい。